

## 日本における作業療法士の臨床の理由づけ（クリニカル・リーズニング）を理解する

小田原悦子<sup>\*,1)</sup> 西方浩一<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>聖隷クリストファー大学 <sup>2)</sup>文京学院大学

1. 目的 本研究では、日本の作業療法専門職の質の発展に貢献することを目的にする。研究者が、これまで積み重ねた日本の作業療法士の臨床経験の成果を生かし、2010年代における日本の作業療法士の臨床経験を理解し、これまで作業療法士が臨床実践で積み重ねた実践力を新しい世代に伝承できるように、言葉を与えることをゴールとする。作業療法の新分野へ挑戦し、独自のやり方を展開してきた作業療法士、展開しつつある作業療法士が、振り返り、臨床経験を語るナラティブをデータとして収集し、作業療法士の臨床行動を支える考え、価値、信念を理解する。

作業療法士は、患者と親密な協力関係を持ち、状況を共有し、前向き、目的志向的に一緒に活動に従事することに治療的価値を見る。Hasselkus は、この治療を成立させる理想的な臨床姿勢を「作業的場所」と表現したが、本研究では、どのように作業療法士が「作業的場所」を作るかを探る。

2. 方法 便宜的サンプリング方法および二段階制（Cohen, 2000）を用いて選定した、経験豊富な臨床の作業療法士5名を対象に、臨床場面の参加観察を実施した。その後に、半構成的インタビューを行った。インタビューは1回1-2時間程度、1名の研究協力者から5回ほどのインタビューと、1回の参加観察を行い、参加観察のフィールドノートとインタビュー逐語録を現象学的なナラティブ分析を使って分析した。

3. 結果 研究協力者となった作業療法士は、男性2名、女性3名、年齢は50代2名、40代2名、30代1名だった。作業療法士の患者および利用者は、2歳~70代、男性4名、女性4名だった。臨床領域は、リハビリテーションセンター、就労支援事業所、発達療育センター、精神科病院と多岐にわたり、入院作業療法、外来作業療法、相談、就労支援をふくみ臨床形態は多様だった。患者・利用者の診断名は、脳性まひ痙直型、上肢切断、脳動脈奇形、脳卒中、認知症であった。

5名の作業療法士の担当する各1~2名の計8名の患者あるいは利用者の作業療法場面の参加観察を行い、その後に臨床経験についてインタビューを行った。インタビューは、各患者・利用者により異なるが、各1~3回、所要時間は1.5時間から4時間だった。

作業療法士たちが、患者・利用者の導入から、どのように作業的場所を作ったかに焦点を当て、その臨床経験を分析した。

本研究では、異なる領域の作業療法士たちが、異なるタイプの患者・利用者を対象にして、個々の患者と作業的場所を作る過程を探り、以下のことに重要性を見出していることが理解された。

- ① 作業療法士は、患者・利用者と作業療法士との協力関係が重要であり、それを構築するには、まず作業療法士に対して開いた状態、信頼した状態になることが重要であると見ている。
- ② 作業療法士は、患者・利用者が適切な活動に従事して、その経験を積み重ねる前の段階として、患者・利用者が表現しているニーズ・意欲を慎重に確認する。
- ③ 作業療法士は、困難なゴールに挑戦するには、特に、ニーズと意欲を繰り返し確認する。
- ④ 作業療法士は、確認するために、言語的コミュニケーションだけでなく、元来の行動パターン、活動中の対象者の態度、表情、わずかな動き、重度障害の対象者の覚醒程度、内臓機能の状態まで考慮して、その患者・利用者の意思を解釈する。
- ⑤ 作業療法士は、患者・利用者を“主人公”と考え、自分を“黒子”と考え、患者・利用者がゴールを達成するのが最優先と考える。
- ⑥ 自分のニーズを言語化できない患者・利用者の場合は、特に、病棟や作業療法場面のその人の活動や周囲の人との交流からイメージを描き、その人のニーズや好みの活動を探そうとする。
- ⑦ 虚弱な患者・利用者に対しては、積極的活動や交流に参加して、充実感を体験することを期待するよりは、安全な環境で安心でき、周囲の人々とその場の交流を楽しむことをゴールとすることもある。

4. 考察 個々の患者・利用者の状態、大きな状況を考慮に入れ、柔軟に対応し、協力体制で、対象者が経験を積み重ねるように援助することが理解された。

5. 結論 ニーズと意欲を確認する重要性を作業療法士の間で共有する必要がある。今後、学会発表を予定している。